

2 中村地平の略歴と主な作品

福島 亜月

略歴

1908(明治41)年2月7日、父常三郎、母仲の次男として生まれる。

1920(大正9)年4月、宮崎県立宮崎中学校に入学。

1922(大正15)年4月、18歳、台湾総督府立台北高等学校に入学。

1930(昭和5)年4月、東京帝国大学文学部美術史科に入学。

1932(昭和7)年1月、小説「熱帯柳の種子」を『作品』に発表。

1933(昭和8)年、東大大学院に入学。

1934(昭和9)年、都(みやこ)新聞社(現東京新聞)に入社。

1935(昭和10)年7月、『日本浪漫派』同人に参加。

1937(昭和12)年12月、小説集『旅先にて』(版画荘)刊。

1938(昭和13)年3月、小説集『熱帯柳の種子』(版画荘)刊。4月、「南方郵信」を『文学界』に発表。第7回(昭和13年上半期)芥川賞候補となる。

1939(昭和14)年1月、小説集『戦死した兄』(竹村書房)刊。この年、小説取材のため台湾各地を旅行。

1940(昭和15)年5月、小説集『蕃界の女』(新潮社)刊。8月、小説集『小さい小説』(河出書房)刊。

1941(昭和16)年3月、随筆・評論集『仕事机』(筑摩書房)刊。6月、長篇小説『耳長国漂流記』(河出書房)9月、『台湾小説集』(墨水書房)刊。12月、陸軍報道班員としてマレーに派遣される。

1942(昭和17)年5月、長篇小説『あおば若葉』(博文館)刊。

1943(昭和18)年2月、森玲子と結婚。11月、随筆集『船出の心』(文林堂双魚房)刊。

1944(昭和19)年3月、記録小説集『マライの人たち』(文林堂双魚房)刊。妻子とともに、宮崎の実家に疎開。6月、『日向』(新風土記叢書五・小山書店)刊。小説集『愛のある眺め』(大鏡閣書店)刊。12月、民話集『河童の遠征』(新民話叢書・全国書房)刊。

1945(昭和 20)年 1 月、日向日新聞社(現宮崎日日新聞社)入社。

1946(昭和 21)年 2 月、西部図書の創立に参画。7 月、長編小説『白百合先生』(西部図書)刊。

1947(昭和 22)年 5 月、宮崎県立図書館長となる。12 月、菊書房の創立に参画、顧問となる。民話集『河童の遠征』(菊書房)再刊。

1948(昭和 23)年 1 月、小説集「太陽の眼」(西部図書)刊。9 月、小説集『義妹』(小山書店)刊。12 月、小説集『陽なた丘の少女』(養徳社)刊。

1950(昭和 25)年 2 月、第 1 回宮崎県文化賞受賞。

1953(昭和 28)年 11 月、第 12 回西日本文化賞受賞。

1954(昭和 29)年 6 月、『日向民話集』(日向日新聞社)刊。※同年塩月桃甫死去。

1956(昭和 31)年 6 月、随筆集『卓上の虹』(日向日新聞社)刊。

1957(昭和 32)年 7 月、『日向』(角川文庫版・角川書店)刊。10 月、宮崎相互銀行に取締役として入社。

1963(昭和 38)年 2 月 26 日、心臓麻痺のため自宅で亡くなった。享年 55 歳。

【中村地平の本名】

中村地平は自らがあこがれた南方の風土で培われた南方文学を提唱した宮崎出身の作家である。県立図書館長を務めた時期もある nado 宮崎の文化に深く関わった人物だ。本名は中村治兵衛(なかむらじへえ)、「中村地平」というのはペンネームである。中村治兵衛という名前が嫌だったらしく、旧制宮崎中学校入学を機にペンネーム『地平(ちへい)』を名乗るようになった。

【太宰治との関係】

東京大学在学中に多くの著名な作家との交流があった。中でも、太宰治との出会いが地平に影響を与えた。太宰と地平は性格と生き方が対象的であった。太宰治は作家としての人生に集中できたことで今でも多くの人に愛読されているが、地平はさまざまな事情や病気のために作家に専念することができなかった。そのことを地平自身悔やんでいたのではないだろうか。

【地平の出発点となった作品】

地平は生涯に 22 の著書を刊行している。その中でも、24 歳で初めて書いた小説『熱帯柳の種子』の中で描かれる風土は地平が台湾時代に住んでいた家そのものだった。このことから地平は住んでいた台湾のあたたかく牧歌的な印象で色に例えると赤やオレンジをイメージさせる風土を愛していたと考えられる。この風土を地平が愛したことが南方文学を提唱するきっかけとなったのではないだろうか。なお、この小説は地

平が憧れた佐藤春夫に認められた処女作でもあった。

【地平の分身・・・風土記『日向』】

『日向』は1944(昭和19)年地平が36歳の時に書いた作品であり、興梠英樹氏は「彼の知性、感性、思想を『日向』に触れることなしに語るのは難しい。(中略)彼はひたすら日向の自然を風土として描写した。そこでは日向はまるで彼の分身であるかのようにさえ見える。」(注・1)と述べている。『日向』の特徴は直接的には自然描写が書かれていないが、風景や雰囲気を読者に伝わる作品だと思う。また、興梠氏も「風土を小説の核に置くという点で、中村地平はまぎれもなく先駆者であった。」(注・1)と述べている。

引用文献

中村地平・解説興梠英樹『中村地平小説集』, 鉦脈社, 1997年, p.439-440

参考文献

宮崎ケーブルテレビ, 「宮崎の肖像」, livedoor,

http://blog.livedoor.jp/miyazaki_rekishu/archives/51195309.html (参照 2008.03.05)

中村地平・解説興梠英樹『中村地平小説集』

鉦脈社, 1997年, p.434、435、449

宮崎の101人

<https://www.pref.miyazaki.lg.jp/contents/org/chiiki/seikatu/miyazaki101/hito/053/053.html> (参照 2022.10.05)